

## 【短 報】 野生動物

## 栗沢町内の路上で傷病救護されたトビの衰弱死の原因について

浅川 満彦<sup>1)</sup> 吉野 智生<sup>1,2)</sup> 魚住 大介<sup>3)</sup>

1) 酪農学園大学獣医学類 医動物学ユニット (〒069-8501 江別市文京台緑町582)

2) 釧路市動物園 (〒085-0204 釧路市阿寒町下仁々志別11)

3) なんぼろ動物病院 (〒069-0237 空知郡南幌町栄町2丁目1-18)

——北獣会誌 65, 64~66 (2021)

北海道内各地では数多くの傷病野生鳥類が救護され、北海道・北海道獣医師会が指定する「野生傷病鳥獣受診動物病院」等に搬入されている。その収容原因としては建造物や車両への衝突事故が多い<sup>[1-3]</sup>。そのため、道路上で見つけられた個体に対しては、その負傷原因を交通事故と即断されてしまう傾向がある。しかし、死亡した野鳥を剖検すると、実際には寄生虫等の感染により衰弱をしていたため、車両との衝突を回避できなかったなど複数の要因が絡むような症例も見出される<sup>[4-6]</sup>。今回は路上にて保護収容されたトビ *Milvus migrans* の剖検により、衰弱死した要因が交通事故の他にもあったとされた1例を紹介する。

## 材料および方法

2011年2月28日、北海道岩見沢市栗沢町岐阜にて、飛べない状態のトビが収容された。現場は農村地帯の歩道上であった。当該個体は近隣動物病院で加療後、その翌日に酪農学園大学野生動物医学センター (WAMC) に搬入された (WAMC登録番号AS11093)。WAMCの運営規定上、バイオリスク軽減のため、簡易検査キットを用いた高病原性鳥インフルエンザウイルス (エスプラインA インフルエンザ: 富士レビオ、東京) およびウエストナイルウイルス (WNV/SLE Vec Test: Medical Analysis Systems, USA) の簡易検査を実施した。いずれも、陰性が確認されたので、保温・静穏状態にして入

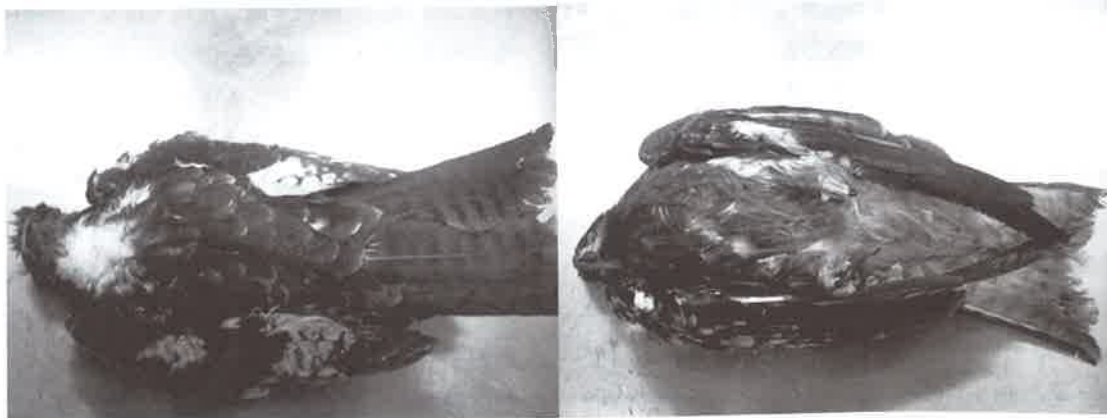


図1. WAMC収容直後死亡したトビの外貌 (左: 背側、右: 腹側)

連絡責任者: 浅川 満彦 酪農学園大学獣医学類 医動物学ユニット

〒069-8501 江別市文京台緑町582

TEL 011-388-4758 FAX 011-387-5890 E-mail: askam@rakuno.ac.jp

院させた。しかし、搬入して約2時間後に衰弱死した(図1)。死体はWAMCにおいて、常法に従い剖検された。

## 結 果

個体情報および計測値は次の通りであった：雄幼鳥、体重1,058 g、全長620 mm、翼開長1,434 mm、自然翼長481 mm、最大翼長498 mm、翼差218 mm、翼幅280 mm、尾長305 mm、露出嘴峰長(蠟膜込)43.4 mm、全嘴峰長46.8 mm、嘴高22.1 mm、嘴幅22.7 mm、全頭長81.6 mm、跗蹠長58.4 mm。

特徴的な外部所見としては、嘴(蠟膜)基部(図2左)、頭頸背部(図2右)、左肘関節部背面(図3左)における裂傷と出血を認めた。特に、同関節部では上腕骨が一部露出していた。また、右手根部にも小裂傷を認めた(図3右)。しかし、翼部・脚部とも骨折は認めなかった。

剥皮による所見としては、皮下脂肪を十分に蓄積しており、左胸部の皮下から筋内に出血および同胸筋部に刺創などが認められた(図4左)。胸筋の萎縮は認めなかった。解剖所見としては、嗉嚢は採餌物で膨満し、内臓脂肪は十分に蓄積されていた(図4右)。

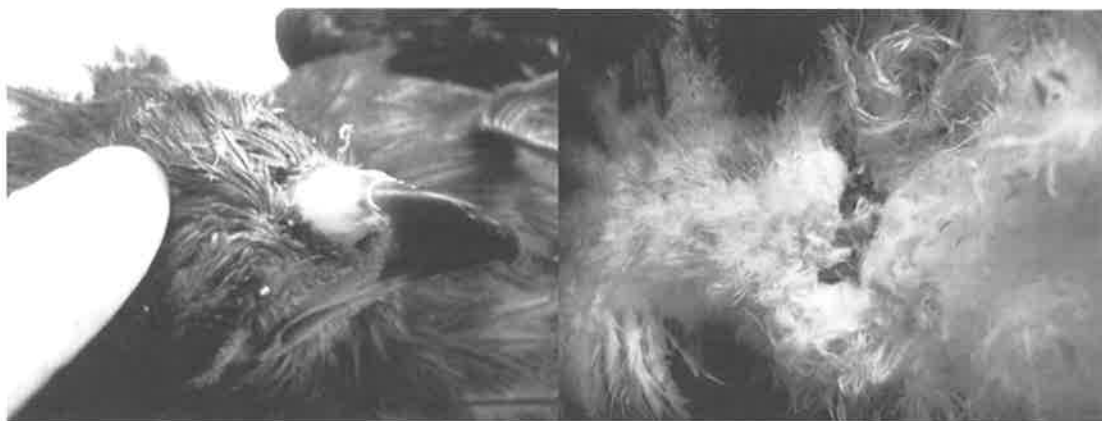


図2. トビの嘴基部(左)と頭頸背部(右)の裂傷と出血



図3. トビの左肘関節部背面(左)の裂傷・出血と右手根部小裂傷(右)



図4. トビの左胸部皮下から筋内の出血と同胸筋部に刺創(左)および内臓脂肪の状態(右)

## 考 察

当該個体は皮下脂肪と内臓脂肪を十分に蓄えており、胸筋の萎縮もなかったことから、栄養状態は良好で、飢餓状態は否定された。また、嗉嚢内に採餌物があったことから、死亡する直前まで食欲があったことが示唆された。さらに、左浅胸筋・左肘関節部の損傷および肺出血から、体部左側を中心に強打されたことが示唆された。しかし、右手根部の裂傷と胸筋の刺創は、これら強打要因とは別の原因が考えられた。以上の剖検所見から想像するに、まず、左胸部中心が車両に衝突して負傷し、一時的に弱った状態のところをカラス等に襲われたことが考えられた。すなわち、前述した刺創は、カラス類趾の爪痕と見なしたことを根拠にした。

通常ならば、この事例は、道路上で救護されたので、死因は交通事故と即断されたであろう。これを回避する手段のひとつとしては、個々丁寧な剖検を行い、今回のように記録を残していくしかない。なお、このような目的から、現在、著者らは既に公表済のWAMCにおける剖検所見を1冊にまとめた冊子を刊行する準備をしている。

## 引用文献

- [1] 柳川 久：北海道東部における鳥類の死因、日本野鳥の会研報、12、161-169 (1993)
- [2] 柳川 久、澁谷辰生：北海道東部における鳥類の死因Ⅱ、帯畜大研報、19、251-258 (1996)
- [3] 吉野智生、上村純平、渡邊秀明、相澤空見子、遠藤大二、長 雄一、浅川満彦：酪農学園大学野生動物医学センターWAMCにおける傷病鳥獣救護の記録 (2003年度～2010年度)、北獣会誌、58、123-129 (2014)
- [4] 吉野智生、浅川満彦：斜里町海岸に漂着した重油付着海鳥類死体の剖検所見、知床博研報、39、33-35 (2017)
- [5] 吉野智生、渡邊秀明、浅川満彦：釧路港内で発見された着色された海鳥類の剖検記録、釧路博紀要、37、41-44 (2017)
- [6] 吉野智生、飯間裕子、齋藤慶輔、渡辺有希子、松本文雄、浅川満彦：鶴居村温根内で回収されたタンチョウ幼鳥の剖検記録および胃内容物、獣畜新報、68、599-604 (2015)